

信頼支えに挑む大技

中央の24人の練り子だけで屋台の重みを支える台場練り＝恵美酒宮天満宮神社（昨年10月）



浜の宮天満宮 ■台場差し

頭上の屋台 一気に肩へ

十月、一年を振り返りながら、姫路のまちには、年一度のハレの日が立つ。その主役は、練り子。祭りの祭りの祭りの祭りに奉納される全国各地の山車、だんじり類の中でも、姫路の屋台の重さを担うのは、練り子だ。

黒光りする漆塗りの屋根、金銀に輝く装飾の金具、屋根の下にある彫刻。姫路で主役となつてゐる神輿屋台を載せた屋台は、匠の技を集結した総合芸術品だ。さらに、地区ごとに伝わる多様な練り方が、屋台の個性を際立たせる。

浜の宮天満宮（飾磨区）の秋季例祭（八月八、九日）は、豪華な「台場差し」で知られる。「サエハチヨウ」の掛け声で、練り子たちが重さ二ト以上の屋台を放りしめる。宙を舞った屋台を受け止める



浜の宮天満宮と同じ10月8、9日、秋祭りが開かれる恵美酒宮天満宮神社（飾磨区）は、台場を肩に乗せて練る「台場練り」が有名。氏子8地区が披露する。

練り子ら全員が高々と屋台を差し上げ、拍子木の合図で一斉に手を

「恵美酒宮」「津田」でも勇壮

放す。約2トという屋台の重みが24人の肩にのしかかる。歯を食いしばり心一つにする。

ほかにも、飾磨区内では津田天満宮神社の「一気差し」も荒技として知られる。狭い拝殿の中で、屋台を地上から一気に頭上まで差し上げる。

のは、わずか二十四人の差し手。屋台下部にある台場を、頭上に突き上げた両手で支え続ける。呼吸が止まる危険で、頭上を揺れたままの状態で打ち落とされた大敵の数を恐る。「八五五」に始まったとされ、氏子に頼られるんです。今年、四地区が伝承を口伝

り、隣町天神地区の素戔香呂真、水田裕一郎さん（右）は語る。天神の屋台は台場差しに適した形で、戦前から受け継ぎ、大切に使ってきたものだ。水田さんは「伝承は、浜の宮の屋台の重さを支えてきた」と力を公めた。